

国家試験に対する組織的な取り組み

保健福祉学部 高木 雅之・川原田 淳・小池 好久・古山千佳子
 永吉 美香・西田 征治・林 優子・藤巻康一郎
 森 大志・山西 葉子・吉岡 和哉・吉川ひろみ

1. 取り組みの背景

平成10年から平成19年までの10年間と平成20年以降の10年間の作業療法士国家試験の全国合格率の平均を比較してみると、ここ10年間の合格率のほうは10ポイント程度低くなっている（図1）。平成10年から平成19年までの10年間の合格率は90.0%であるのに対して、平成19年以降の10年間は80.4%に留まっている。この低下の原因の一つとして、5つの選択肢から2つの正解肢を選択する問題（X2タイプ）が増え、国家試験の難易度が上がったことが関係していると考えられる。

本学の前々身である広島県立保健福祉短期大学の1期生が受験した平成9年の国家試験から平成18年までの合格率は、常に95%以上であった。しかし、全国の合格率の低下と同様に、本学の合格率も低下し、平成19年以降では合格率が90%を下回ることも4回あった。さらに平成28年に行われた国家試験の合格率は過去最低の77.8%となり、全国平均を下回った。このような事態を受け、作業療法学科ではFD活動促進事業として、学科全教員が団結して国家試験合格率向上のための組織的な取り組みを行ったので、その内容と成果をここで報告する。

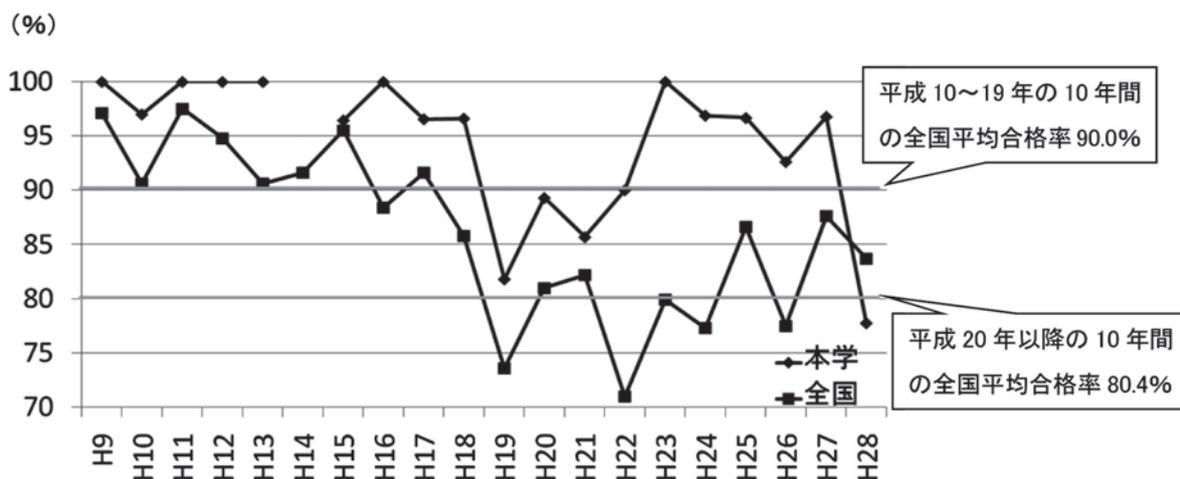


図1 作業療法国家試験の全国の合格率と本学作業療法学科の合格率の推移

2. 取り組み内容

(1) 原因分析

本学科国家試験合格率の低下の原因を分析した。まず4年間で卒業した学生と留年等で5年以上かけて卒業した学生との合格率を比較した。平成29年度までに4年間で卒業した学生の合格率は96.6%（572名／592名）であるのに、5年以上かけて卒業した学生の合格率は71.4%（25名／35名）であり、25ポイント以上の差があることがわかった。また入学時からGPA制度のもと教育を受けた学生が初めて卒業した平成25年以降の本科卒業時GPA平均は2.8であるのに対して、国家試験不合格者10名中8名の卒業時GPAは2.7未満であった。つまり、国家試験不合格者の多くが、入学時からの学修の積み重ねが不十分であった可能性が示唆された。

次に、本学科の国家試験合格率のばらつきに注目した。過去10年間の全国の国家試験合格率の標準偏差が4.7ポイントであるのに対して、本学科の標準偏差は6.4ポイントであり、全国よりも大きかった。これは、4年次チューター2名と学科長が中心となって行っていた本学科の国家試験の学修支援体制が影響していると考えられた。4年次のチューターは毎年変わるため、効果的な支援方法が構築されにくいという問題点があった。さらに、ほぼ教員3名のみで学修支援を行っていたため、多く学修支援が必要であった年には、十分な支援を行えていなかった可能性も考えられた。

最後に、国家試験の学修を本格的に始める時期にも原因があると考えた。本学科では10月上旬にすべての実習が終了し、学生はそこから卒業研究の仕上げと就職活動を行いながら、国家試験の学修を進めていた。実習終了時期が他の学科と比べ遅いうえに、就職の内定状況によっては、さらに国家試験の学修を本格的に始める時期が遅くなっていた。

(2) 分析結果に基づく取り組み

分析の結果、国家試験合格率を上げるためには、入学時からの学修の積み重ねを強化すること、学科としての学修支援体制・方法を構築すること、国家試験学修開始時期を早めることが必要であることが明らかとなった。

① 入学時からの学修の積み重ねの強化

ホームルームの開催、成績不良者に対する個別・グループ学修支援、国家試験模擬試験の実施、授業における国家試験問題の活用の拡大を行った。各学年のチューターが1年生では計4回、2年生では計5回、3年生では計3回ホームルームを開催し、クラス全体の学修意欲の向上と主体的な学修の定着を支援した。また成績不良学生に対しては、個別に面談を実施したり、グループで学修する機会を作り、基本的な学修習慣が身に付くように支援した。2年次や3年次の春季や夏季の長期休業中の学修を促進するために、長期休業明けに模擬試験を実施した。国家試験出題割合の高い運動学、身体障害評価学・治療学、精神障害治療学、日常生活援助論などの科目では、過去の国家試験問題を例年以上に取り入れて授業や試験を行った。

② 学科としての学修支援体制・方法の構築

国家試験学修を効果的に支援するためのポイントを学ぶために、国家試験対策指導教員セミナーへの参加と外部講師による国家試験対策講演会の開催を行った。国家試験対策指導教員セミナーで

は、教員2名が8月26、27日に福岡市の国試塾リハビリアカデミーで開催されたセミナーに参加した。外部講師による国家試験対策講演会の開催では、10月27日に佐藤善久先生（東北福祉大学教授、日本作業療法教育研究会副会長）をお招きして、高い国家試験合格率を誇る東北福祉大学での学修支援の方法を学んだ。セミナーや講演会で学んだ学生自身の国家試験学修のポイントと教員の学修支援のポイントを表1にまとめた。さらに、学科の全教員による支援体制を構築し、学生の国家試験学修グループごとに担当教員を配置し、学修の進捗状況を把握したり、得点が伸び悩む学生に対して個別の支援を行った。上記の取り組みを行いながら、来年度以降も効果的な学修支援を行えるように国家試験学修支援マニュアルを作成した。

表1 学生の国家試験学修のポイントと教員の学修支援のポイント

国家試験学修のポイント
<ul style="list-style-type: none"> •決まった時間、決まった場所で学修をする習慣をつける（1日12時間） •グループで学習する •出題割合に応じて学修をする •毎年出題される問題（全体の8割分）を8割回答できるようになる •簡単な絵やキーワードで他者に説明できるようになる
学修支援のポイント
<ul style="list-style-type: none"> •すべての教員が全員合格に向けて団結する •全員で合格するという学生の気運を醸成し、士気を高める •クラス全体に対して学修状況と得点状況の把握・視覚化・共有、学修ペースの目安の提示を行う •個別支援の必要な学生を早期に把握し、特別グループや個別の支援を実施する

③ 国家試験学修開始時期の前倒し

3年生においては2月から毎週1回の国家試験対策勉強会を計10回開催し、国家試験学修への早めの取りかかりを促した。また、カリキュラムの検討を行い、4年次の9月に実施されていた特別臨床実習を2年次に移行すること、その時期に国家試験対策科目として作業療法総合演習を新設することを決定し、平成32年度の4年生からは9月上旬から国家試験学修を本格的に開始できるようにした（図2）。

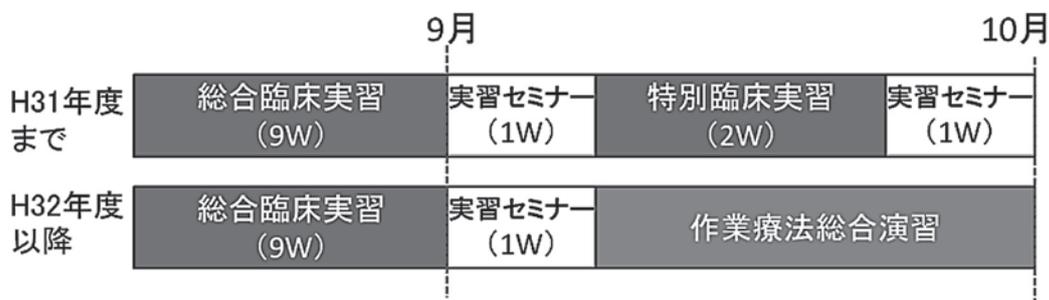


図2 国家試験学修開始時期を早めるカリキュラムの変更

3. 取り組みの成果

現4年生の3年次の年度内GPAは2.86となり、同学生の2年次の年度内GPA2.56より0.3ポイント上昇した（図3）。同様に、現3年生の2年次の年度内GPAは2.92となり、同学生の1年次の年度内GPA2.7より0.22ポイント上昇した。さらに現2年生の1年次の年度内GPAは3.03となり、昨年度、一昨年度の1年次のGPAより0.3ポイント以上高かった。これらのことから、入学時からの学修の積み重ねを強化できたと考える。

平成29年度に実施された国家試験合格率の合格率は、93.8%（30/32名）となった（図4）。平成29年度の全国の合格率は、平成28年度よりも5%以上低下したのに対して、本学では15%以上上昇し、過去5年間で全国合格率との差は最も大きかった。

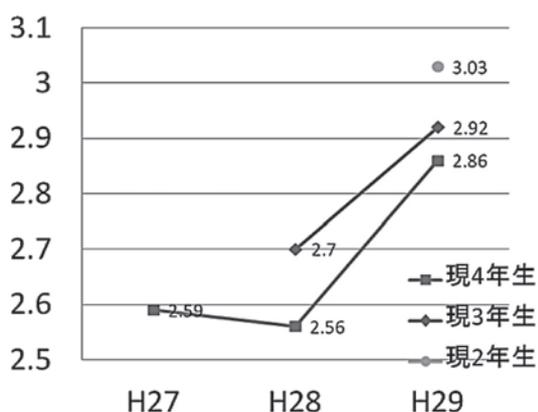


図3 各学年の年度内GPAの推移

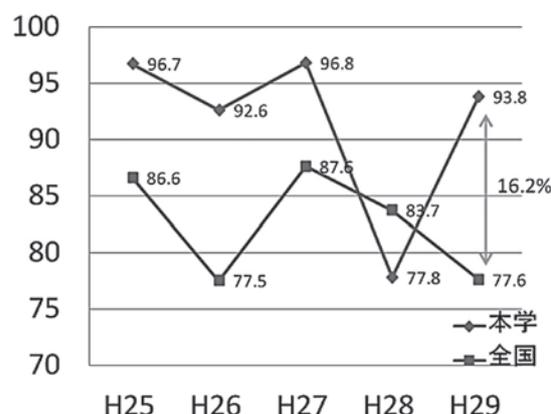


図4 過去5年間の合格率の推移

4. 今後の課題

平成29年度の国家試験では32名中2名が不合格となり、2名とも過年度生であった。学修の積み重ねが十分でない可能性のある過年度生に対しては、より早期に重点的な支援が必要である。同様にGPAの低い学生や国家試験模擬試験低得点の学生に対しては、早期の対応を求められる。

4年次チューターは就職活動と国家試験学修の両方を支援している。国家試験学修支援では、クラス全体の学修状況の把握に加え、得点に伸び悩む学生の個別支援も行っている。4年次チューターの負担を軽減し、十分な学修支援ができるような体制を考えていく必要がある。今後も組織的な取り組みを強化し、国家試験合格率100%を達成したい。